

「遠い過去のことについて書き記す歴史家は…山の上から そういった過去の世界を見ることができる」は直訳か

藤本幸伸

To What is “Literal Translation” Loyal?

Yukinobu FUJIMOTO

(Received September 25, 2009)

本論文で、極めて不人気の、そして何かとあげつらわれることの多い「文法訳読」について若干の考察を試みようと思う。英語の大学入学試験から全文和訳問題が消え、部分和訳を課す大学も僅かになって久しい。「訳しても英文の意味が掴めない」「一文一文を時間を掛けて訳してもパラグラフ全体の構造が掴めない」「訳しては速読ができない」など訳読への批判は、叩けば出てくる埃のように、切りがない。「果たして譯讀は百害あって一利なきものか、それとも場合によっては独自の機能を發揮するのではないかといふ問題を捕へて、譯讀に十分の同情を抱きつつも、その弊害の何れにあるかを冷静に指摘せん」として『譯讀と翻譯』¹⁾を澤村寅二郎が研究社から出版したのは、昭和10年(1935年)であった。文法訳読批判の根は深い。

このような「百害あって一利なき」訳読を尻目に登場してきたのが、1980年代から提唱され始めたスキーマ理論によるトップダウン処理の読解モデルだ。近年この読解モデルに修正が加えられる過程で、ボトムアップ処理も見直され、「訳して初めて意味が分かったという経験は誰にでもあるのではないか」と文法訳読にも少し日の目を見るようになってきている。では文法訳読が復活するのかなと言えばそうではなく、「いくらボトムアップや訳読式を見直すとはいえ、その実施の仕方は考え直す余地があろう」(森、2)というように、文法訳読の功罪を見極めておかなければ、またぞろ文法訳読は悪者に仕立て上げられるのが落ちだろう。

文法訳読に考察を加えると言っても、いつ頃から文法訳読による英語教育が始まったのかという歴史的側面、英語の授業で文法訳読をどのように導入するかという英語教授法的側面、あるいは英語と日本語の言語構造の差を意識させる語学的側面など、どの角度から眺めるかで文法訳読像は変わってくる。ここでは、文法訳読で少なからず問題となる<直訳・意識>の問題を整理しておきたい。始めに、代表的な英文読解の参考書で、どのような方針で訳文を提示しているのか、その意図と実際を確認する。次に、かくまで根深い文法訳読が、どのような歴史的事情から生まれてきたのかを概略する。最後に、「文章を読む」ことは「文章を理解する」ことだから、訳文とは理解したことの表現であるという視点に立ち、原文理解の表出としての訳文を、1990年代以降の翻訳研究(Translation Studies)の観点から見直していく。

1. 「文構造に忠実な訳文」という幻想

これから具体的に分析する訳文は、英文読解の標準的な参考書²⁾から抜き出したもので、高校生の英文和訳の基準となっていると考えていい。事実、この参考書の著者たちは、「本書

の構成と使用法」で自分たちの訳文が高校生の目指すべき「水準」だと明言している。

訳文はできるだけ文構造に忠実なものとし、英文の文構造からかけ離れた“達意の名訳”はあえて避けてある。これは、英文構造の把握がどれだけできているかを自分で容易に確認できるように配慮したものであるが、同時に、この程度の訳出ができれば十二分であるという訳文の水準をも示している。ただし、Challenge 問題の解説の最後に掲げた「全文訳例」だけは、全体の文内容の理解をそれに委ねることも狙って、文意・文脈を生かした訳文になっている。(ix)

この文章の中に、訳文を巡る問題点が凝縮されている。一つは、「できるだけ文構造に忠実なもの」、つまり、英文の文構造が透けて見える訳文を目指して、「英文の文構造からかけ離れた“達意の名訳”はあえて避けてある」直訳であるという点だ。しかも、「英文構造の把握がどれだけできているかを自分で容易に確認できるように配慮した」とわざわざ強調してあるように、著者たちの訳文は「同時に、この程度の訳出ができれば十二分であるという訳文の水準をも示している」と言う。ここで著者たちは、英文の文構造が透けて見える直訳こそが訳出の水準だと宣言しているのだ。

もう一つは、文構造が透けて見える直訳とは対立する訳文が掲げられているという点だ。この参考書は、英文構造を解説する箇所では直訳を提示し、最後に全文訳例まで用意してくれている。その全文訳例は、「全体の文内容の理解をそれに委ねることも狙って、文意・文脈を生かした訳文」、つまり、“達意の名訳”ではないが、「文意・文脈を生かした」意識なのだ。

何気なく読むと、文構造が透けて見える訳文で英文構造の把握を確認し、内容が透けて見える全文訳で文全体の内容が理解できる、痒いところまで手の届く参考書のようなのだ。だが、果たしてそうだろうか。従来の<直訳・意識>の考え方からすれば、<直訳>が「文構造に忠実な」訳文で、全文の理解を委ねる「文意・文脈を生かした訳文」が<意識>となるはずで、どうすれば「文構造に忠実な」訳文から「文意・文脈を生かした訳文」が生まれるのだろうか。そもそも「文構造に忠実な」訳文は可能なのか、そして、「文意・文脈を生かした」といってもその「文意・文脈」は「文構造に忠実な」訳文から自ずと出てくるのだろうか、と疑問は尽きない。

おそらくこういう疑問自体が、この著者たちには無縁なのかもしれない。「文構造に忠実な」訳文を作れば、それが文章全体を理解したことと等しいのであって、“達意の名訳”では「英文の文構造からかけ離れ」ているから、理解からかえって離れてしまう。だから、「文意・文脈を生かした」訳文は、あくまでも「英文の文構造からかけ離れ」た訳文であってはならないのだ。つまるところ問題は、「忠実」とはなにかという、あまりにも自明で誰もが意識しないところに潜んでいると言えそうだ。以下、その「忠実」の実態を見ていくことにしよう。まずは、英文構造を解説する箇所に掲げられた「文構造に忠実な」訳文を見ておこう（一文ごと解説される訳文を、ここでは便宜上、繋ぎ合わせておく）。

晴れた日に山頂から見た下の世界の眺めは、非常に鮮明である。われわれは、周囲の山、谷や川、町や農地や森を容易に確認できる。遠い過去のことについて書き記す歴史家は、自分の目にするものについてどの2人の歴史家の意見も完全に一致するわけではないだろうが、山の上からそういった過去の世界を見ることができ。しかし、現代史を扱う歴史

家には過去を見わたせる山頂といったものは存在しない。実際、彼らは森の奥深くで道に迷った人のように感じる事がよくある。つまり、木々は見えても、森全体は見えないのである。しかし、ともかく現代史を研究している歴史家や政治学者は、現代につながる画期的な出来事を確認する姿勢を持たなければならない。彼らは、最近の歴史の無数の出来事の中から、最も重要であるように思われ、現代史の謎をとく何らかの手がかりを与えてくれる出来事を選ばなくてはならない。というのも、過去を多少とも理解するだけで、われわれが今どの地点にいるかを知ることができ、将来、森を通り抜ける道がいくつか与えられるからだ。(5-8)

一読して、この「文構造に忠実な」訳文に、問題点はなさそうだ。ただ、冒頭の山頂の眺めと歴史家とがどのように繋がるのかが分かり難いが、そこを大目に見れば標準的な訳文といったところだろう。しかし、この訳文を「忠実さ」という点から英文と見比べていくと、その「忠実さ」とは何か分からなくなってくる。著者たちにとって「文構造に忠実な」訳文、すなわち文章全体の理解だとすれば、「忠実さ」が文章理解を保証することになるはず。言い換えれば、如何に「文構造に忠実な」訳文であるかが重要になってくるのだ。では、英文を読んでみよう。

The view of the world below from the top of a mountain on a sunny day is very clear. We can easily identify the surrounding mountains, the valleys and rivers, the towns, farms and forest. The historian who writes of the distant past can view that world from the mountain, although no two historians would agree completely on what they see. But there are no mountain peaks from which historians of the modern era can look over the past. Indeed, they often feel like a man lost deep in the forest; he can see the trees, but not even the forest as a whole. Yet, somehow, historians or political scientists studying our own age must try to identify the landmarks that lead to the present. They must select from the countless events of recent history those which seem the most important and which provide some clue to the mysteries of modern history. For only some understanding of the past enables us to know where we are and provides some paths through the forests in the future. (2 下線は省略)

The view of the world が very clear だ。clear であるから山頂から眺めた景色は easily identify できる。古代史研究は、過去をあたかも山頂から眺めるように鮮明に眺めることができる (can view that world)。冒頭部分は、このように視覚の縁語 (view, clear, identify, view, see) を使って、文と文との意味の繋がりを生み出している。英文が視覚の縁語という文構造で文意の流れを生み出している以上、「文構造に忠実な訳文」はこの文意の流れをも「忠実」に訳出しているはずだ。ところが、上の訳文では「眺めは、非常に鮮明である。われわれは…を容易に確認できる。」とあるだけで、英文の文構造が生み出している view → clear → can identify という文意の流れを「忠実」に訳出してはいない。

更に、この二つの文を受けて次の文では、山頂から眺めるように古代史家も鮮明に過去を眺めることができると文意が流れているのだが、「歴史家は…山の上からそういった過去の世界を見ることができる」という訳文は如何にも唐突な感じを拭いきれない。しかも、英文では文末に位置する「どの2人の歴史家の意見も完全に一致するわけではないだろうが」という

although 節を、訳文では文中に埋め込んで文構造への「忠実さ」を犯してきえている。そもそも、although (though) は、主節に先行する場合と主節に後続する場合とで働きと意味が異なることくらい、辞書を見れば分かるはずだし、著者たちも知らないはずはない³⁾。しかも、英文では The view of the world below from the top of a mountain と can view that world from the mountain は語彙上の関連が明快だが、長い although 節のあと唐突に現れる「そういった過去の世界」が何を意味するのか、この訳文から理解できるはずだというのは酷だろう。

もう一つこの「文構造に忠実な訳文」の問題点、最後の文に出てくる焦点の副詞 only について検討しておきたい。「過去を多少とも理解するだけで、知ることができ、…与えられる」と訳出されているが、「だけで」は、例えば「ワンクリックするだけで注文ができます」と言えるように、「(ほんのちょっとした事態を表す文につけて) その事態が下の文の表す事態が成立するための必要十分な最低の条件であることを示す」(『学研国語大辞典』)。だがここでは、過去を鳥瞰できる古代史家とは違って、森の中で迷子状態にある現代史家は「現代史の謎をとく何らかの手がかり」を見つけて、森から抜け出さなくてはならない。森から抜け出すために必須の some understanding of the past を、「必要十分な最低の条件」とは考えにくい。ここでは、「過去を理解してはじめて、…が掴め、見えてくる」あるいは「過去を理解してしか、…掴めないし、抜け出せもしない」と only の持っている「他の可能性を排除して…に焦点を当てる」という強意で解釈すべきではないか。

only をどう訳出するかは、語義の問題であって、「文構造に忠実な訳文」とは直接関係しないと強弁されるかもしれない。とすれば、「文意・文脈を生かした訳文」の問題というのだろうか。この「文構造に忠実な訳文」から、全体の内容理解を委ねることを狙った「文意・文脈を生かした訳文」で変わったのは次の4点だけだ。第1文の「世界の眺めは、非常に鮮明である」の読点と第2文の「われわれは、」が無くなり、第8文の「最近の歴史の無数の出来事」が「最近起こった無数の出来事」に、第9文の文末「からだ」が「からである」に訳し変えられた。実質上、何も変わっていない。「文構造に忠実な訳文」こそ著者たちの考える「文意・文脈を生かした訳文」であり、「全体の文内容の理解」を委ねることができるはずだったのだろう。しかし、である。英文の構造上明らかな視覚の縁語をそれと分かるように「忠実に」訳出せず、文末にある副詞節を文中に埋め込んで「忠実な」語順を犯し、「だけで」という only の訳語が英文内容を「忠実に」反映していない。果たして、「文構造に忠実な訳文」とは何なのだろうか。

何をそんなに学習参考書ごときに目くじら建てて批判するのかと、訝られる向きもあろう。やがて大学生になって、専門書を読み、英語力も鍛えられ、ちゃんとした日本語の訳文を作ることができるようになるのだから、と楽観する向きもあろう。だが、現実には楽観できない。実際、英語学英米文学及び英語教育を専門とする学生でも、英語学もしくは言語学概論は学んでも、読み書きに必要な文章単位の文法(情報構造や機能に基づいた実用文法)⁴⁾を学ぶ機会はいくつかではないか。もし学習したとしても、学んだ文法知識を援用して訳出することは絶無ではないか。もしそうであれば、ほとんどの英語学習者は、大学受験の際学んだ文法と訳文の作り方のレベルに留まっているのではないだろうか。果たして、この不安は杞憂にすぎないと言えるだろうか。次に挙げる訳文(といて失礼であれば、“翻訳”)を読んだ後も、杞憂だと切り捨てられるだろうか。

社会の仕事全体のなかでの分業の効果は、いくつかの特定の製造業で分業がどのように作

用しているかを考察することによって、いつそう容易に理解されるだろう。分業はいくつかのきわめてささやかな製造業でもっとも進んでいると一般に考えられているが、それはおそらく、他のもっとも重要な製造業よりも、実際にそうした製造業のほうが分業が進んでいるためではなく、少数の人々のわずかな必要しか満たさないにきまっているささやかな製造業では、職人の総数は当然に少ないに違はなく、各作業部門にたずさわる職人が同一の作業場に集められ、見る者の一望のもとにおかれることが、しばしばありうるからである。これに反し、多数の人びとの多大な要求を満たすことになる大きな製造業では、どの作業部門も多数の職人を働かせるため、彼らをすべて同一の作業所に集めることは不可能である⁵⁾。

「文構造に忠実な訳文」の見本であり、文意の分かり難くい代表例でもある。「それはおそらく」と結びの「からである」が離れすぎ、しかもその間に主従関係の判然としない修飾語句がいくつも重なり合っているのが、分かり難さの原因だろう。この訳文は、2000年出版の岩波文庫版アダム・スミス『国富論』から取った。2000年の時点でこのような訳文が出版されるということは、この手の訳文がどれほど分かり難さを伴っているとも原文に「忠実な」訳文と評価されている証左と言えるだろう。これは極端な例と思われるかもしれない。現実には想像を超える。

本章では、階級というマルクス主義の範疇に先立って存在し、これを生み出した言説の母体を解明する手だてとして、分類思考 (classificatory thinking) の歴史を取り上げてその二つの局面についていくつかの見解を述べる。ここで検討する二つの挿話はマルクスの時代以前の出来事であるとともに、マルクス主義の用法において「階級」と歴史的に関連づけられている資本主義工業社会の形成にも先行するものであるため、筆者もまた、階級という用語が記述するものは何か、それはすべての近代社会に観察できる客観的な一群の物質的条件（あるいは関係）を指しているのか、それとも社会階層における人物の位置を理解あるいは画定するひとつの様式を指すものか—だとすれば、それは19世紀になってはじめて可能になるわけだが—というような議論に一枚加わるつもりなのかと思われるかもしれない⁶⁾。

英語表現の繊細な髪を掬い取る読みを日々実践しているはずの、英米文学を専門とする人たちの訳文である。訳者たちは原文と比べればこの訳文がどれほど「忠実」かが分ってもらえると考えたのだろうか。原文と突き合わせて読むことをしないのであれば、この「文構造に忠実な訳文」が分からなくても、それは仕方ないと言うのだろうか。なぜ分かりやすさを犠牲にした「文構造に忠実な訳文」はこうも生き延びるのであるだろうか。このような文意への配慮に欠ける「文構造に忠実な訳文」を再生産しては、「文法訳読」への批判がぶり返すのも当然だろう。次に、なぜこのように「文構造に忠実な訳文」が我々の中で深く根を下ろしているのか、その淵源を簡単に探っておきたい。

2. 「文構造に忠実な訳文」のふるさと

歴史を振り返ってみれば、どの国も、モデルとなる文化を自国の言葉に組み込み一段高い文化国に飛翔しようとする際、翻訳という営みを不可欠とした。ギリシャをモデルにしたローマは、聖書をギリシャ語からラテン語に翻訳しキリスト教を国教としたし、英国詩人ワイヤットは、ルネサンス詩人のペトラルカを翻訳しイギリスにソネット形式を定着させた。日本は中国

の文章を、漢文訓読を使って翻訳し教養とした。翻訳は、優れた文化の移入装置であった⁷⁾。

ここで問題にしている「文構造に忠実な訳文」は、ヨーロッパの言語、中でも英語文化を真剣に学ぼうとした明治時代の先達が編み出した方法である。ただし、この分野は、資料も先行研究も膨大なので、ここでは簡単な経緯だけに絞っておきたい⁸⁾。

幕末、日本近海に欧米列強が出現し、外国文化との接触が頻繁になる。1808年のフェートン号事件から1853年の黒船来港の外国文化との接触を受け、1856年に開講した蕃書調所（後1862年に洋学調所となる）で、蘭学と英学を中心にした教育が始まる。1873年（明治6年）の東京外国語学校皮切りに開講していく各地の外国語学校では、お雇い外国人教師が英語やドイツ語で授業を行った。英語の達人新渡戸稲造も、1876年に開校した札幌農学校でほとんどの教科を英語で教わっていた。お雇い外国人教師から教科を英語で学び、日本語の介入はわずかであった。そして、このお雇い外国人教師に学んだ日本人が、母国語で学問を教授できるまでに自立すると、東京と大阪を除き外国語学校は次々と廃止され、お雇い外国人教師もその役目を終えていく。ところが、この頃からエリートたちの英語力低下が声高に叫ばれ、民間の英語学校が創設されるようになる。それが、明治20年（1887年）前後である。

この明治20年を境に、『スプリング独案内』『リードル（リーダー）独案内』『英文典独案内』という学習参考書が大量に出版されることになる⁹⁾。この学習参考書で行われていたのが、漢文訓読を模した英文直訳であった。英単語一つ一つに対して、上に発音を、下にその訳語を記し、更にその訳語を繋げていく順番を記した数字を付して、訳語を順番通りに並べれば漢文訓読のように訳文が出来上がるという仕組みであった¹⁰⁾。明治20年発行の山本秀雄『ニューナショナル第三リードル獨案内』から LESSON II の例を挙げておこう。

イツ	ヴェリー	ハード	トゥー	ハヴ	ナスイング	トゥー	イート	バツト	
¹⁷ It	²⁰ s	¹⁸ very	¹⁹ hard	¹⁶ to	^{13,15} nothing	¹² to	¹¹ eat	¹⁰ but	
其ガ	有ルト	甚ダ	難儀デ	事ノ	持タ	何物ヲモヌ	可キ	食フ	外

ブレッド	アンド	ミルク	ホエン	アザ	ボイズ	ハヴ	ナイス	フツド	セツド
⁷ bread	⁸ and	⁹ milk,	⁶ when	¹ other	² boys	⁵ have	³ nice	⁴ food,	³⁰ said
麵包	及	牛乳ノ	時ニ	他ノ	男児ガ	持ツ	好味ノ	食物ヲ	云ヒシ

ジェームズ	アズ	ヒー	サツト	ウィヅ	ヒズ	ボール	ビフォーア	ヒム
²¹ James,	²⁹ as	²² he	²⁸ sat	²⁷ with	²⁵ his	²⁶ bowl	²⁴ before	²³ him.
ジェームズガ	時ニ	彼ガ	坐セシ	以テ	彼ノ	碗ヲ	前ニ	彼ノ

このような訳文が延々と続く学習書や読み物で欧文解読法を教え込まれた学生が教師となり、「文構造に忠実な訳文」を次々と再生産していくことになる¹¹⁾。では、お雇い外国人教師の下で外国語を学んだ世代と日本人教師と上のような学習書で外国語を学んだ世代との翻訳に対する態度の違いを確認しておこう。

二葉亭四迷は「余が翻譯の標準」で、「外國文を翻譯する場合に、意味ばかりを考へて、これに重きを置くと原文をこはす虞がある」（419）から「コンマ、ピリオドの一つをも濫りに棄てず」、「語數も原文と同じくし、形をも崩すことなく、偏へに原文の音調を移すのを目的とし」た翻訳を最初には行っていたが、どうにも出来上がった「自分の譯文」は「いや實に讀みづらい、

きくつごうが
佶偈聲牙だ、ぎくしゃくして如何にも出来榮えが悪い」。なぜこれほどまでに原文に「忠実な」翻訳の方法を採ったのかというと、「文學に対する尊敬の念が強かったので、例へばツルゲーネフが其の作をする時の心持は、非常に神聖なものであるから、これを翻譯するにも同様に神聖でなければならぬ、就ては、一字一句と雖、大切にせなければならぬやうに信じた」(420)からだと言う。最終的に二葉亭四迷が思い至った翻訳の「根本的必要條件」が次に一節だ。

元來文章の形は自ら其の人の詩想に依って異なるので、ツルゲーネフにはツルゲーネフの文體があり、トルストイにはトルストイの文體がある。其の他凡そ一家をなせる者には各獨特の文體がある。この事は日本でも支那でも同じことで、文體は其の人の詩想と密着の關係を有し、文調は各自に異つてゐる。従つてこれを翻譯するに方つても、或る一種の文體を以て何人にでも當て嵌める譯には行かぬ。ツルゲーネフはツルゲーネフ、ゴルキーはゴルキーと、各別にその詩想を會得して、厳しく云へば、行住座臥、心身を原作者の儘にして、忠實に其の詩想を移す位でなければならぬ。是れ實に翻譯における根本的必要條件である。(420)

意味ばかりを考えて原文を壊す虞れのある翻訳、当時のいわゆる翻案ものに不満だった二葉亭四迷が、最初に採った方法がコンマや語数までも原文に「忠実な」訳文であつた。が、この失敗から同じ忠実でも「忠實に其の詩想を移す」ことを「翻譯における根本的必要條件」としたのであつた。この「忠實に其の詩想を移す」ことを翻訳の基準と考えるのは、森鷗外や坪内逍遙といった明治20年以前にはほぼ教育を終えたものたちが多い。

次に取り上げる野上豊一郎は、明治41年(1908年)に東京帝國大学を卒業する漢文訓読調の訳文を鍛えられた世代の代表と言ってよい。野上は、昭和7年(1932年)に「翻譯の理論」を發表、さらに「翻譯の態度」や「菟菟問答」を付け足して、昭和13年(1938年)に岩波書店から『翻譯論-翻譯の理論と實際』を出版するほど、翻訳に対して頻りに発言を行つてきた。「翻譯の態度」で野上は自分の理想とする完全な翻訳の要素を3点挙げている。その第一は、原作の表現を「一語一語の末まで正確な意味を把握して傳へ」ること、第二は、翻訳した言語の特性が「原作の國語の特性を最近似の度合いに於いて聯想させる」こと、最後は、出来上がった翻訳は「全體として、措辭・語法の點点から見ても、文勢・格調の點から見ても、原作のそれ等と同質・同量のうつつし」(93)となっていること、である。これだけを見ると、野上の完全な翻訳は至極まっとうな考えのように思える。だが、「菟菟問答」で、「文構造に忠実な」直訳が抱える問題のエッセンスが見事に語られる。「明治維新以來70年」になるのに、本格的な翻訳が無い。「逍遙・鷗外・二葉亭等の諸先輩の翻譯の態度には飽き足りない」として、「単色版(モノクローム)的翻譯」を提唱する。Bが「西洋人の表現には西洋人流の慣用法があり、日本人の表現には日本人流の慣用法がある」のだから、「忠實に直譯的に翻譯する」と分かり難いだろうというと、野上の「単色版的翻譯」論者であるAは、次のように応じる。

- A それを押し切つて、西洋人流の慣用法を日本語でやり通すところに意義があるのだ。
B 理論の上ではね。ところが、實際の場合になるとすぐ行き詰まってしまうだろうよ。ここに前置詞の用法を集めたものがあるから、この中から一二の例を擧げて見ても、たとへば、——
The world is all before us.
これを、

世界はみなわれわれの前にある。

とただけで、原文の意味がはつきりとわかるだろうか。

A よくわかるじゃないか。それでわからない奴にはわからないでもよい。それ以上に工
作を施してもらひたくないね。

世界はみなわれわれの前にある。

と、原文にはそれだけのこときり言ひ表してないのだから。(226-7 強調は引用者)

このように、AとBとの問答は延々すれ違ったままで終わる。単色版的翻訳論者のAは、「原文はさういつた表現はしてないよ。君は原文の意味と對等の意味を日本語で言ひ表わさうと努力するのだが、僕は原文の表現をそのまま日本語で表現しようと求めるのだ。表現さへ正しく傳へれば、意味はおのづから表はれるべき筈だ」(229 原文のまま)と言う。

「文構造に忠実な」直訳がなぜこうも長生きをするのか、これでその理由が明らかだろう。直訳は日本語の中に原文の表現(姿)をそのまま留める手段であり、読み手は直訳からその原文の姿を復元して、復元した原文で意味を理解するのだ。だから、「それでわからない奴にはわからないでもよい」、つまり原文の読めない「奴」には直訳はわからないのは当然であった。「文構造に忠実な」直訳は、原文が読め直訳も分かるエリートと分からない「奴」を差別する役目を担ってきたのだ。

「文構造に忠実な」直訳が、エリートの自己差別化の手段だったという解釈は、意外かもしれない。だが、伊藤整の『翻譯の研究』は、このエリート自己差別化としての直訳を前提に、自己の翻譯論を展開する。伊藤もまた、逍遙・上田敏・鷗外の翻譯を「日本文の格調に苦心してゐる」(32)として退け、直訳を推奨する。「日本人の智識階級の大部分は、英語英文の習得に相當の時間を割いてゐるし、種々なる媒介物を通して外國から入って来る夥しい量の文化智識は、西歐の風俗習慣を何らの新奇さも見出せなくなるほど一般人に親しいもの」だ。

その上英語を習得する時に日本語を英語の文脈に宛てはめて理解してゐた我々には、英語の文脈そのものが非常に親しみのあるものとなり、かつ文章上に口語文が使用されるやうになったため、英語を理解する時の思考法を直接日本文として書き記す習慣が生じて来た。…つまり英語教育の上で理解を助けるために假に使用する日本文、「あなたが昨日逢ったところの男は私の弟です」、「横濱へ行かんとしつつある」、「この文章が意味する處のものそれは重大である」といふやうな文章が、あまり不思議だという觀念を人に與へなくなつて来てゐる。場合によっては翻譯を、さふいう文體でする方が原文の味をよく生かすことが出来て便利であるのである。さふいう様な翻譯をしても現在翻譯文を読む程度の人々は明白に文章の意味する處を汲み得るようになってゐる。(33 強調は引用者)

伊藤がいう「翻譯文を読む程度の人々」とは、「英語英文の習得に相當の時間を割」き、「西歐文の直譯體の文章」(31)に慣れ親しみ、「西歐の風俗習慣を何らの新奇さも見出せなくなるほど」の「日本人の智識階級」、つまりエリートたちのことなのだ。逆から言えば、「西歐文の直譯體の文章」を読み、「明白に文章の意味する處を汲み得」ない人々は、エリートではないということだ。果たして、「西歐文の直譯體」は、エリートとそれ以外を差別する役目を負っていたのだ。

なぜこのような差別化をする「直譯體」が流布するようになったのだろうか。一つには、「西

歐文の直譯體」が漢文訓読を範としたことと関係がある¹²⁾。明治政府が明治5年に学制を公布し、広く時代を担う人材を教育し始める時期、漢字制限が話題となった。貴族、武士や商人の一部を除き、素養の一つである漢文の学習は、その漢字の多さ故に難しいというのだ。裏返せば、漢字だらけの漢文を素読し漢文訓読できるということ、そして漢文訓読調の文章を読み書きできるということは、エリートの証であったのだ。だから、読売新聞などの市井の出来事を伝える小新聞と比べて、東京日日など大新聞の政治経済の動向を扱う社説で言文一致がなかなか進まなかったと言えるのだ¹³⁾。

もう一つは、漢文を訓読するのはなぜかということに関わる。古田島洋介氏は「原文の意味を表出することよりも、原文の字句を脳裏に表出することこそ、なによりも訓読に期待された役割」(60) だと言う。次の文章の「古典中国語」を英語に変えれば、そのまま英文直訳に当てはまるのが分かるだろう。

訓読文という日本語を暗誦し、その原文喚起力によって原文の字句が脳裏に浮かぶように、つまり原文が暗記できるようにした—この二重の暗記過程が組み込まれた記憶術こそが漢文訓読の正体ではないのか。漢文訓読の結果として得られた訓読文は、それ自体は日本語でありながら、日本語としての翻訳文よりも、自身が生まれ出た古典中国語の原文のほうを指向しているのだ。少なくとも、そう理解しさえすれば、訓読と翻訳のずれ、すなわち訓読の翻訳割引率が合理的に説明できると信ずるのである。(60)

「西洋人流の慣用法」を日本語の中にそのまま留める英文直訳は、その「原文の表現」から「明白に文章の意味する處を汲み得る」ものを「日本人の智識階級」として認め、わからない「奴」を排除する仕組みを内蔵している。この英文直訳のエリート指向を保証する機制が、「西洋人流の慣用法」を保持しいつでも原文字句を脳裏に表出する漢文訓読調の直訳表現なのだ。英文直訳が執拗にその「忠実性」を堅持してきた相手は、原文の意味ではなく、直訳が内蔵しているエリートの自己差別化機制であったのだ。そこでは、〈直訳・意識〉のいずれが原文理解に資するかは問題ではなかったのだ。最後に、かくも無意味なく直訳・意識〉の呪縛を、翻訳研究という視角から解きほぐしてみたい。

3. 「文構造に忠実な訳文」の解体

直訳か意識かで必ず触れられるのが、イディオムの訳出である。さすがに今では、野上のように The world is all before us. を「世界はみなわれわれの前にある」と訳出すべきと頑なに主張するものはごくわずかであろう。だが、I worked in hotels for years, so I know what I'm talking about. の下線部の表現はどうだろうか。今でこそ辞書には「専門家である、そのことについては詳しい」とイディオムとして記載されているが、「私は何を喋っているか自分で分かっているつもりだ」と訳出しても完全な誤訳とは言いつけず、イディオムとして訳出するのか、直訳のままかは、判断に困るところだろう。次に、受動態の例を取り上げてみよう。

- a) The actions of men were said to be governed by the faculty of reason.
- b) There's nothing to be surprised at.
- c) Buildings will be transformed into piles of rubble.

それぞれどう訳出すればよいだろうか。a) はそのまま「人間の行動は理性に支配されている」と言われている」と受動態の定番「される」で訳出し、b) は感情の表現だから「驚くべきことは何もない」と能動態で訳出するのが普通だろう。では、c) はどうだろうか。「建物は瓦礫に変化させられるだろう」となるのだろうか。

こう見てくると、「文構造に忠実な訳文」と言っても必ずしも「文構造」に忠実なのではなく、従来からそう訳してきたという習慣に「忠実」なだけではないか。どのような基準で「文構造に忠実な訳文」にすべきか、すべきでないのかを決定しているのか不明なのだ。そこで勢い、従来通りの訳出で間に合わない時は「文構造に忠実な訳文」になってしまうのではないか。その「文構造に忠実な訳文」があまりにも生硬だと、その生硬さを和らげる工夫として「この場合はこう訳す」式の訳出のマニュアル化が起こり、このマニュアルから漏れる表現はやはり「文構造に忠実な訳文」のままで処理されることになる。だからといって、用例を集め訳出のパターンを網羅すればそれで好いというのもでもない。

原点に戻ろう。何のために訳出するのか。冒頭で引用したように「訳して初めて意味が分かったという経験は誰にでもある」のだ。訳出とは、原文をよりよく理解し、理解したことを表現する営みと了解しておこう。原文をよりよく理解するために、辞書と文法などの工具書がある。だが、大学受験までに学習する文法は文レベルの文法で、文章の分析までには至っていない。よしんば、文章レベルの分析を行い原文の理解が得られたとしても、その理解をどうやって「訳して初めて意味が分かった」と言えるような訳文に変換できるのか。今度は、日本語文法の知識が必要となってくる。複数言語の知識が要求され、言語の知識だけでなく他文化をどのように理解するのかという文化理解の枠組みまでもが、その視野には行っていない。

こういった言語の知識だけでなく、他文化理解のあり方までも視点に取り入れて研究する分野に、翻訳研究がある。最近の翻訳研究では、翻訳者の可視性 (visibility) や文化の翻訳が大きな話題の一つなのだが、ここでは主題構造と情報構造の知見が翻訳でどのように適用されているかをマンデイ (Munday) で確認し、その成果をマンデイのテキストに当てはめて、どう<直訳・意訳>の呪縛を解きほぐせるかを試してみよう。a) はブラジル・ポルトガル語の文とその逐語訳である。これをごく普通に英語訳したのがb) で、さらに両言語の主題・情報構造を考慮して訳出したのが、c) である。

- a) Analisou-se as relações da dopamine cerebral com as funções motoras.
[Analysed-were the relations of dopamine with the motor functions.]
- b) The relations between dopamine and motor functions were analysed.
- c) An analysis is carried out of the relations between dopamine and motor functions.
(Munday 95)

文頭に位置するブラジル・ポルトガル語の動詞は、一連の行為の始まりを示し主題 (=旧情報) を担うのに対し、英語は文頭に主題 (=旧情報) を文末に新情報を置く文構造をもつ。b) のように、動詞を文末に置くと英語では新情報扱いとなり、原文の情報構造に違反することになる。だから、c) のように訳出する必要がある、と翻訳研究では翻訳のあり得べき姿を模索している (本来は、これに両言語の文化をも考慮せねばならないのだが、煩瑣になるので割愛する)。次は、この主題・情報構造が言語間で異なる現れ方をすることを説明した文章を使って、この英文自体の主題・情報構造を分析し、その分析 (=理解) をどのように日本語に訳出すべ

きかを探ってみよう¹⁴⁾。

An inherent problem in this kind of study is that thematic structure is realized differently in different languages. Baker gives a number of examples from languages such as Portuguese, Spanish and Arabic. These are verb-inflected languages which often place the verb in first or 'theme' position, as in the Brazilian Portuguese example above. The consequent omission of the subject pronoun also inevitably creates a different thematic pattern. Thus, the following sentence from a speech to the European Parliament produces a different thematic structure in different languages. (Munday 95) 注：それぞれゴチックは「主題」を、イタリックは「異なる言語」の語彙的結束性を示し、二重下線は「旧情報」を示す

この英文自体の分析はさほどの困難ではない。「主題・情報構造の研究」を指す下線部の this kind of study が前段の内容を引き継ぎ、述部の that 内の主語 thematic structure が主題、述部の realized differently in different languages は題述 (=新情報) として提示されている。第2文は、この新情報のうち different languages を取り出し、第3文はこれを主語に据えて旧情報化し (These)、これらの言語について verb-inflected languages であるという新情報を提供する。第4文では、屈折語の特性として含意される The consequent omission of the subject pronoun が旧情報の主語の位置に置かれ、これが creates a different thematic pattern という新情報を導く。ここまで、英語の主題・情報構造に沿った英文の配置となっている。最後の文は、通常の主題・情報構造を逆転させて、本来新情報が来るべき位置に a different thematic structure in different languages というこのパラグラフの中心内容を据えて強調している、と一応分析できる。問題は、このような分析を訳出にどう反映させるのかということだろう。

ここで取り上げたハリディー派の主題・情報構造は、あくまでも英語の分析を中心にしたモデルであって、他言語にそのまま適応できない。その意味で、日本語の文章や談話で主題や情報がどのように構造をもつのかは日本語学の研究を待つほかないのだが、現状は「文章・談話の研究が、言語学や国語学、日本語学の対象とされるようになって、半世紀余になるが、他の日本語研究の領域に比して、今なお開拓期にあるといっても過言ではない」(iii) と佐久間まゆみ氏が言うように、訳出にすぐ適用できる日本語の文章・談話の知見が揃っているわけではない。だからと言って手を拱いているわけにも行かないので、謂わば、他人の禰で相撲を取るようだが、マンデイの日本語訳を取り上げて検討してみよう。

この種の研究に固有の問題は、主題構造は言語ごとに具現の仕方が異なるという点である。 ベーカーは、ポルトガル語、スペイン語、アラビア語などの言語から多数の事例をあげている。 これらは動詞屈折語の言語であり、動詞が節頭、つまり「主題」の位置に来ることが多い。 上記ブラジル・ポルトガル語の例がそうである。 結果として主語代名詞が脱落し、必然的に異なる主題パターンが生じる。 したがって、欧州議会への演説から引用した以下の文では、言語が異なると、異なる主題構造が産出される。 (以下省略) (147-8) 注：網掛けは文末動詞を、二重下線は「旧情報」を、下線は「新情報」を示す。

SVO 語順の英語は、主語が主題 (=旧情報) を、題述の中でも目的語が新情報を担うという情報構造を持つのに対し、SOV 語順の日本語は、動詞の直前の語句が新情報を担うと言われている。両言語で、主題・情報構造を等価にしようとすれば、両言語独自の情報構造に揃っているかどうかは訳出の一つの基準となると言える。だが、上の例示でも分かるように、日本語は英語ほどすっきりとした主題・情報構造を抜き出せない、あるいはハリディー派の主題・情報構造では日本語の主題・情報構造はうまく摘出できないのかもしれない (分析の不味さはさておいて)。さて、この翻訳は原文の第3文を二つに分けて、訳出している。そうすることによって長い第3文をすっきりと訳出する。だが、翻訳日本文の情報構造を再度見ると、情報の流れが滞っているようにも見える。「これらは動詞屈折語の言語であり、動詞が節頭、つまり「主題」の位置に来ることが多い。上記ブラジル・ポルトガル語の例がそうである。結果として主語代名詞が脱落し…」の、「主題」の位置に来ることが多い」と「結果として主語代名詞が脱落し」が連続しているほうが、屈折語だから主語代名詞が脱落するという論理がスムーズに流れ分かりやすいのではないか。少なくとも、原文の情報構造はそうなっている。とすれば、このような原文理解を訳文にも反映させるには、原文の表面的な文構造ではなく、意味の流れに「忠実」な訳出をする以外にない。例えば、次のような訳出も一つの試みではないだろうか。

ベーカーが多数の事例をあげているポルトガル語、スペイン語、アラビア語などは動詞屈折語の言語であり、上記のブラジル・ポルトガル語の例でも分かるように、動詞が節頭、つまり「主題」の位置に来ることが多い。結果として主語代名詞が脱落するので、必然的に主題パターンは異なってくる。

確かにこのような訳出は可能ではあるが、訳者として相当の勇気のいることだろう。監訳者の鳥飼久美子氏が後書きで「まず、翻訳研究に関する専門書を翻訳するという、根源的な課題の重さがある。翻訳に間違いがあってはならないのは当然としても、翻訳に関する書だからこそその重荷もあった。訳出には神経質にならざるをえず、ひとつひとつの単語、「てにをは」、句読点に至るまで拘泥せざるをえなかった。読者にとって読みやすく分かりやすい日本語をめざしながらも、原文に忠実であること、とりわけ内容が正確であることを期した。訳者の立ち位置を鮮烈に意識しながら、慎重に翻訳に取り組んだ」(327) と書かざるをえなかったように、大胆な訳文に対する無理解な批判や誤訳指摘を神経質なまでに怖れていたことが伺えよう。

訳文あるいは翻訳の質を向上させるには、訳出とは原文を理解し、理解したことを表現する営みなのだという共通理解を持つ以外にないだろう。その共通理解が出来上がって始めて、「訳して初めて意味が分かったという経験」を教員と生徒や学生が共有でき、訳文あるいは翻訳の質も高まっていく…と期待したい。だが、現状は厳しい。大学教員ですら「直訳」信仰にも似た考えを持つものは少なくない¹⁵⁾。3年間の学習内容が規定されている中学・高校の教員に、教科書や副読本や参考書の訳文を「訳して初めて意味が分かったという経験」にまで高める余裕はあるだろうか。更に、最後の語学訓練の場である大学の英語教育が TOEIC 一色になりつつあることを鑑みると、原文理解の表出としての訳文を共有していくのは困難かもしれない。

だからといって、手を拱いてもいられない。歴史的に英文直訳は、原文の「表現」から文章の意味を汲み取るものをエリートとして認定し、そうでない「奴」を排除する仕組みを内蔵している。エリート自己差別化機制が有効である限り、英文直訳はまたぞろ「直訳」を解しない

「奴」を生産し続けるだろう。英語学も日本語学も、その学問的進歩は目覚ましく、早晚、文章分析も進み、各言語の主題・情報構造も明らかになることだろう。しかし、どの段階でこの学問的知見は共有されるのだろうか。この知見はまたしても、エリート自己差別化の道具となるのだろうか。また、訳文あるいは翻訳は、ただ言語の置き換えという作業に留まるものではなく、他文化理解のあり方までも縛りかねない営みである。一体、英文直訳をもってして、他文化の正しい理解と言えるのだろうか。直訳を巡る問題は、何重にも堅く纏れた糸のようではあるが、一つ一つその纏れを解していくしかないだろう。

注)

- 1) 澤村寅二郎の『譯讀と翻譯』が『英語教育叢書』全31巻の第7巻として研究社より刊行された昭和10年(1935)は、昭和2年(1927)に東京帝國大学教授藤村作が「英語科廃止の急務」を發表して、英語教育への風当たりが厳しかった時期にあたる。
- 2) 特定の参考書をあげつらうのが目的ではなく、標準的でまともな参考書の代表例として選んだ。『英文読解の透視図』は、高校生の間では「力の付く参考書」としてなかなかの評判であるようだ。
- 3) 『ジーニアス英和辞典』第4版(大修館書店、2006)には、althoughは「② [主節を受けて] しかし (but)」とあり、thoughは「③ [主節の後の従属節を導いて; 等位接続詞的に] もっとも…だが、とは言っても…だけれど (but, however) 《◆事実や意見を軽く付け足す; ①の用法と紛らわしいことも多い》」と、一層詳しい説明を施している。Ronald Carter & Michael McCarthy の *Cambridge Grammar of English* (Cambridge UP, 2006) にある、when used with a subordinate clause **before** a main clause, the meaning is something like ‘in spite of the fact that…’ と when used to introduce a clause **following** a main clause, the meaning is something like ‘but it is also true that…’ という説明も同じ。
- 4) 例えば、Martha Kolln の *Rhetorical Grammar*, Joseph M. Williams の *Style: Ten Lessons in Clarity and Grace*. William Zinsser の *On Writing Well* などの英文作成文法を想定している。
- 5) アダム・スミス『国富論』第1編第1章「分業について」の第2段落の最初の部分(23～4頁)である。訳者の水田洋氏は、1961年に河出書房新社から世界大思想全集の一巻として『国富論』を訳している。ほぼ40年経過している岩波版『国富論』の訳文はその当時の姿をそのまま保持している。
- 6) 2001年に翻訳出版された『階級を再考する』という文学批評書(15頁)から。これもスミスの訳文と同じく、<主-述>が離れすぎているのが、分かり難さの原因であろう。
- 7) 翻訳に生涯を捧げた先人については、山岡洋一を参照。
- 8) 英学については、汗牛充棟のごとく研究がある。最近では、齋藤兆史が詳しい。
- 9) 国立国会図書館の蔵書検索システムで「リードル(リーダー) 独案内」で検索すると、明治16年は1件、明治17年は2件、明治18年は一気に16件、明治19年は19件、明治20年は42件、明治21年は15件という結果であった。
- 10) 国立国会図書館の近代デジタルライブラリでその実物を確認することができる。また、日本英語教育史学会のホームページから「明治以降外国語教科書データベース (<http://www.wakayama-u.ac.jp/~erikawa/database2/>)」(和歌山大学の江利川春雄氏が作成)も

参照。漢文訓読調の訳文がビッシリと縦書きで印刷された『英文直訳』と題した学習書も多く出版されていた。一例として田中太右衛門訳『パーレー氏萬國史直譯』（明治20年）の第2章「序文 歴史及ヒ地理學及ビ他ノ物ニ付テ」の訳文を引いておく。「汝ハ歴史及ヒ地理學ナル辭ニ屢々出逢フタト私ガ想像ス○歴史ハ世界ガ創造サレシ以来ノ人間ニ付ヒテノ話デアル而シテ年ノ千ノ間生活シタ所ノ、而チ建築セラレタル、而シテ滅亡ニ落ツル首府ヲ見タ所ノ、國民ガ興リ榮ヘ而チ滅ブヲ見タ所ノ而シテ驚クベキ物体ニ付テ充分ナル記憶を以テ左様ニ多クノ星霜ノ間起リタ所ノ總テニ付テ汝ニ語ルベク坐スル所ノ老人ニ比較サレ得ル」

- 11) 森岡健二（『言語生活』目次では「直訳と意識」が逆）は、「文構造に忠実な訳文」を扱っていないが、欧文解読法が言文一致体を生み出したという論を展開している。この欧文解読法の基には漢文訓読体がある。この漢文訓読体と言文一致体との深い関係について、齋藤希史などを参照。
- 12) 松下大三郎は『標準漢文法』（中文館書店、1930）で「日本人は漢文を日本讀にして漢文を日本語に同化して仕舞った。此れ世界文化史上驚くべき大事業である。日本人の祖先の偉大であった點はこ々にも十分に認められる。英文などもそうなるべき筈であった。然るに近代人は其所へ氣附かずに直譯を捨てて意譯に走ることとなった。明治の初年に企てられた直譯は今日では蕩然として地を掃ひ纔に直譯的口調の若干を現代文に傳へるにすぎなくなったことは誠に惜しむべきことである」（8）と間接的に漢文訓読と英文直訳との関わりを示唆している。ただし、松下のいう「直譯」は、あくまでも漢文訓読そのままの直訳であって、伊藤の直訳とは異なる。
- 13) 言文一致と新聞の関わりについては、尾藤正二郎及び山口仲美を参照。
- 14) 玉置祐子氏は、「原文/訳文の流れ」の実態を理論的に説明したものは少ない」（157）と現在の翻訳指南書の欠点を指摘し、情報構造型理論による原文分析だけでなく、「情報の重要度が生み出す文脈効果をも考慮することが必要になる」（166）と言い、関連性理論を使った日本語への再構成を提案する。しかし、玉置氏は単文例しか扱っておらず、文章・談話の分析は今後の課題であるようだ。
- 15) 「英語が読めるはずの研究者が、学術書の翻訳をやってこの通りであるから、その他の翻訳は、おして知るべしであろう」（121）と手厳しい原口庄輔氏は、「正確さ」と「わかりやすさ」は全く重なり合うわけではないと言いながら、「正確でない翻訳は、当然わかりにくい、ということになることが非常に多いし、わかりにくい翻訳というのは、これは不正確な翻訳であろう、と疑ってよい」（123）と翻訳の質の基準を提示する。しかし、この「正確さ」を「忠実さ」に変えると、英文直訳が出来上がる。原口氏も、正確さは「じゅうぶんに時間をかけ、念を入れ、かつ良心的に、原文をよく理解した上で翻訳がなされるならば、おのずから解決できるはずのことである」（121）と言うが、実際はそう単純ではないだろう。

【参考文献】

- 伊藤整（1933）『翻譯の研究』 英語英文學講座刊行会
 古田島洋介（1997）明星大学研究紀要 第五号 55-68 「漢文訓読の＜割引率＞—記憶術としての定位—」
 齋藤希史（2007）『漢文脈と近代日本—もう一つのことばの世界』 日本放送出版協会
 齋藤兆史（2007）『日本人と英語—もうひとつの英語百年史』 研究社出版

- 佐久間まゆみ編 (2003) 『朝倉日本語講座7 文章・談話』 朝倉書店
- 篠田重晃・玉置全人・中尾悟 (1994) 『英文読解の透視図』 研究社出版
- アダム・スミス 水田洋監訳 杉山忠平訳 (2000) 『国富論I』 岩波書店
- 玉置祐子 (2004) 『通訳研究』 第4号 157-69 「体系的翻訳論への一試論」
- ワイ・チャー・ディモック、マイケル・T・ギルモア編 宮下雅年・新関芳生・久保拓也訳 (2001) 『階級を再考する 社会編成と文学批評の横断』 松柏社
- 野上豊一郎 (1938) 『翻譯論—翻譯の理論と實際』 岩波書店
- 原口庄輔 (1973) 『英語学』 第10号 120-38 「翻訳の「正確さ」と「わかりやすさ」について」 開拓社
- 尾藤正二郎 (1996) 『神戸親和女子大学研究論叢』 30 36-66 「明治初期の新聞文章と言文一致運動：福地桜痴の「文論」を読む」
- 二葉亭四迷 (1906、1962) 伊藤整・龜井勝一郎・中村光夫・平野謙・山本健吉編集 『日本現代文學全集4 坪内逍遙・二葉亭四迷』 419-21 「余が翻譯の標準」 講談社
- ジェレミー・マンデイ 鳥飼久美子監訳 (2009) 『翻訳学入門』 みすず書房
- 森千鶴 (2008) 『三省堂高校英語教育』 2-5 「リーディング能力をつける指導とは」 三省堂
- 森岡健二 (1968) 『言語生活』 197号 21-31 「翻訳における意識と直訳」
- 山岡洋一 (2001). 『翻訳とは何か—職業としての翻訳』 日外アソシエーツ
- 山口仲美 (2006) 『日本語の歴史』 岩波書店
- Munday, Jeremy. (2008) *Introducing Translation Studies* 2nd. Routledge